

答えのない時代を生き抜く力をつける

～英語指導で培うキーコンピテンシー～

石川 慎一郎

◆キーコンピテンシーとアクティブラーニング

次期指導要領の概要がかたまってきたが、そこでは、教科の枠を超えた汎用的な資質・能力、つまり、キーコンピテンシーの養成が重視されることになる。キーコンピテンシーには、(1)言語・情報・テクノロジーを活用する力、(2)多様な集団の中で他者と関わる力、(3)自律的に行動する力の3点が含まれるが、これらの基礎となるのは「深く批判的に考え、行動する」力である。

こうした新しい能力は、一方通行的な知識伝達型の授業では育成できないため、「深く対話的な学び」としてのアクティブラーニング(AL)が重要になる。その際、問われるのは、活動(タスク)の量が表面的にどれだけ増えたかではなく、学習者の思考が内面においてどこまで深化したかである。これを実現するには、教材も変わらなければならないだろう。学習者に知的な驚きを与え、その常識にヒビを入れ、ある種のモラルジレンマ(moral dilemma)を体験させるような教材が求められることとなる。

◆BIG DIPPER English Communication の挑戦

筆者が関わった上記の図書(以下 BD)では、新しい学力観に正面から向き合い、現代の高校生に「深く考えさせる」ことを主要な編集目標とした。以下では、旧版の BD にもあったフードマイルという題材が、執筆陣による議論を経て、どのように変えられたかを紹介することとしたい。

フードマイルとは、産地から消費地までの食品の移動距離を指す。旧版は、こうした概念を紹介した上で、食品輸入には、安全性の懸念、輸送時の CO₂ 排出による環境破壊の懸念、食料の安定供給の懸念があるので、日本は地産地消を推進すべきだという結論が示されていた。フードマイルは食・環境・産業・国際といった多くの要素を繋ぐすぐれた題材だが、地産地消を進めるべしという結論そのものは学習者の常識を大きく超えるものではないだろう。

これに対し、新しい BD は、そこからさらに一歩踏み出し、にもかかわらず食品輸入が一向に減らない現実を示す。そして、輸送費を含めても輸入食品が圧倒的に安価であること、そのおかげで食品を安く食べられること、日本は食料を輸入して工業製品を輸出することで国際貿易の互恵的ネットワークに組み込まれていることが述べられる。

この段階で、学習者が抱いていた「地産地消は善、食品輸入は悪」という二元論的な価値観は再考を迫られる。では、我々はこの問題にどう対処すべきなのか、価値観のジレンマに引き込まれた学習者は、教科書の中に次の「答え」を求めようとするが、新しい BD は「簡単な解決などありえない」と述べ、「自分で考え抜く」ことを学習者に求める。

現代社会の特徴の1つは、利害が複雑に絡み合い、絶対的な善悪や単純な答えが存在しないことである。BD はこうした現実をそのまま示し、学習者が多面的に物事を考える経験を積めるよう配慮している。BD では、このほか、自転車の復権、成人年齢の引き下げ、ユニバーサルデザイン等、様々なトピックが扱われるが、いずれの場合も「いかにも教科書的な」安易な結論は慎重に排除されている。

考えさせる教材は、意見を引き出す教材でもある。実際、こうした題材であれば、賛成・反対の立場で作文を書かせたり、ディベートをさせたりすることも容易になるだろう。先生方には、BD の題材を通して、学習者が物事を多面的にとらえ、自分の頭で徹底的に考え、他者との意見交換によって自身の思考を深めていけるよう授業内で舵取りをお願いしたい。BD が、英語力はもちろん、「答えのない時代を生き抜く」ためのキーコンピテンシーを伸ばす教材としても広く活用されることを期待したい。

(神戸大学教授)

Revised BIG DIPPER English
Communication I 代表著者